

雑報

●**光りの速さ** 光線(Light)の速さは、昔ロネメル(Römer)が木星の衛星から見つけたのが最初であるが、其の後多くの人々が測定をくりかへし、殊に十九世紀の中頃から純粹な物理學的方法で精密に測定されるに至つた。最近には米國シカゴ大學のマイケルソン(A. A. Michelson)教授がキルソソ山をサン・アントニオ山の二十二哩(八里半)の距離の間に回轉鏡を裝置して光線速度を測つた結果が發表された。(天界第三十五號第三五五頁及び第五十三號第一七五頁參照)今、之れと共に近年の他の結果をならべて見る。

觀測者 光速度(毎秒)

ホルマー(A. Cornu) 二九九九五〇*

ロマン(A. Perot) 二九九〇〇〇

マイケルソン(Michelson) 二九九八九五

ニウカム(Simon Newcomb) 二九九八六〇

マイケルソン(Michelson) 二九九八二〇

●**變光する超巨星** 近頃ハーバート天文臺からのプレチンに依れば、Sドラドスと言ふ變光星は今日知れて居る星のうち最も眞光度の大きな星である事が發見された。

この星は色々な點から見て、大マゼラン星雲に屬する、散解星團(Open cluster) N. C. 1910の一員である事が確定せられる。S

ドラドスは見た所は九等星であるが、この星雲の距離一〇〇〇〇〇光年から計算すれば眞光度は189.3となる。太陽よりも約189.3等だけ光が強いわけで、即太陽の約百万倍の光を發散するのである。今迄これほど光の強い星は發見せられて居なかつた。

この星は變光星である。以前フレミングが夫人が、五十一枚の寫眞板から測定した結果によれば、八.二等から九.四等の間を變光する事が知れて居たが其の變光の性質は不明であつた。近頃ハーバート天文臺でミス、ウィルソンの研究によれば、其の變光は約一.五等であり、其の變光の性質は不規則らしいと云ふ事である。(荒木)

●**金星と水星と火星の接近** 今七月十一日前後、金星(Venus)と水星(Mercury)と火星(Mars)と三つが天空で珍らしい近さまで接近する。その場所は蟹座の中央に近く、太陽より一時半ほど東方であるから、其の日頃、日没後の低い西天を賑はすことだらう。

太陽を中心として三星の相互の位置は本誌第二四八頁の「遊星界」の圖の中に、火金水地の四星を連絡した一直線で表はしてある。地球から見えてゐる者に、此の三つの星が集中して見えるといふことは、即ち、火金水地の四星が一直線上に並ぶことである。

三つの星は此の頃何れも蟹座を順行してゐるが、火星は光りも比較的淡く、速度も緩い。金星は可なり速い足どり、西から火星に迫つて来るが、負三等といふ光輝であるから、

見事なものである。そこへ、水星が最も速い歩みふりでも、亦西からやつて来る。そして十一日に此の三つの星々が相互に非常に接近して、滿月ぐらゐの大きさの圓形の中に三つが皆入つて了う。小さい望遠鏡でも見る人は確かに此の珍らしい現象を喜ぶに違ひない。

此の十一日といふ日に於ける三つの星に關して、左表はいろ／＼の數量を擧げる。

光度	水星	金星	火星
視直徑(南北に)	角〇.二等	負角三.二〇	二.〇
輝面のは(東西に)	三.八秒	一〇.七	三.六
地球からの距離	二九三萬キロ	三三三〇	三六〇
	三〇〇	三三〇	三六〇
	三三〇	三六〇	三九七
	三六〇	三九七	四三三

位置は本誌巻頭に掲げた圖によつて見て頂きたい。三つの星が同じ日に並ぶ形は直線で連れてある。甲圖は三星の最も接近する七月十一日の位置を主として、毎二時間毎の場所を示した。時刻は午前午後の區別を取らず、夜半に始まり次ぎの夜半に終る二十四時間制を用ふ。又、乙圖は七月七日から七月十三日に至る七日間の星々の變移を示す。此の中のアラビア數字は毎日の日附である。

乙圖には蟹座の明るい恒星が幾つか掲げてある。特に興味深いことは蟹座の中の有名な星團プレセペ(Præsepe)を三遊星が通過することである。――火星は六日に、金星は八日に、水星は九日に。多數の恒星の中には遊星體に掩はれるものもあるだらう。此の數日間には觀測者の注意を要す。